奥多摩連峯

多摩川之源流　輝乎黎明之陽
適稜線之軌跡　限天空描山容
奥多摩之連峯　契故郷於山肌
而追憶之思慕　巡天空宿於谷
山脈連自千古　聳於多摩之里
大岳山之雄姿　衝天空待明日

街角に立つと西の空に連らなる奥多摩の山脈が眼に飛び込んで来る。多摩川の源流をなす秩父・大菩薩嶺が夜明けの陽に輝く頃、遙か稜線が空を横切って山容を描いて走る。山肌の一つひとつが眼に映り、その襞の中に数々の想い出が甦えり、驚きと親しみとが織りなす思いを肌身に宿して、しばらくその場に立ち盡す。福生の地から望見するあの山もこの山も、すべて私たちの祖先が武蔵野の一隅から眺めていた山々である。大昔から多摩の里に住む人々の心に深く刻み込まれた故郷の景色である。今日も大岳山が天を衝いて大空に聳え立ち、里人の明日の幸せを祈っているかのようである。「故郷(ふるさと)の山に向いて　言うことなし　想い出の山……」と詩った啄木の心が偲ばれる。

（宮岡一雄）

はじめに

自分の生きてきたありのままを、わが子や孫たちに書きのこしておきたい。自分のことだけでなしに、この福生につながるわが身のまわりのことも、なにかと書きとめておきたい。たくさん書いておきたいんだけれど、そうするには、私のような者じゃ、だめなんです。ちゃんと、それらの学問をしたことのある人でなけりゃあ。

要はやってみることです。

こんな私の考え方に賛同していただいた人たちに、それぞれの立場から書いてもらってまとめたのが、この本です。

そりゃあ、本屋さんにならんでいる本みたいなわけにはまいりませんです。でも、ここに書かれていることは、みんな自分たちが、本当にやってきたこと、そのままなんです。

これと同じ形のもので、第二集がすでに刊行されています。そちらは、私が関係してきた社会教育の範囲にしぼっています。それで、昭和二十年からの、戦後史のようになっています。

この四集でも、正確なものにするためにということで、戦後を主としました。昭和二十年からあとの福生のようすが目に見えると思います。

もっといろんな人に書いてもらって、現代の福生のすべてを残したいのですが、それらは、これからもつぎつぎに続く「ふっさっ子」で、お願いをしていきます。

こうして私たち福生の住人が、自分たちの生の歴史を、この地に残して置けることで、この「ふっさっ子」発刊の意義は大であると思います。

皆さん。どうぞお暇をみて、この本を読みとおしてください。そして、あなたのお家へ、この本を残してやってください。お願いします。

山崎茂男

目次